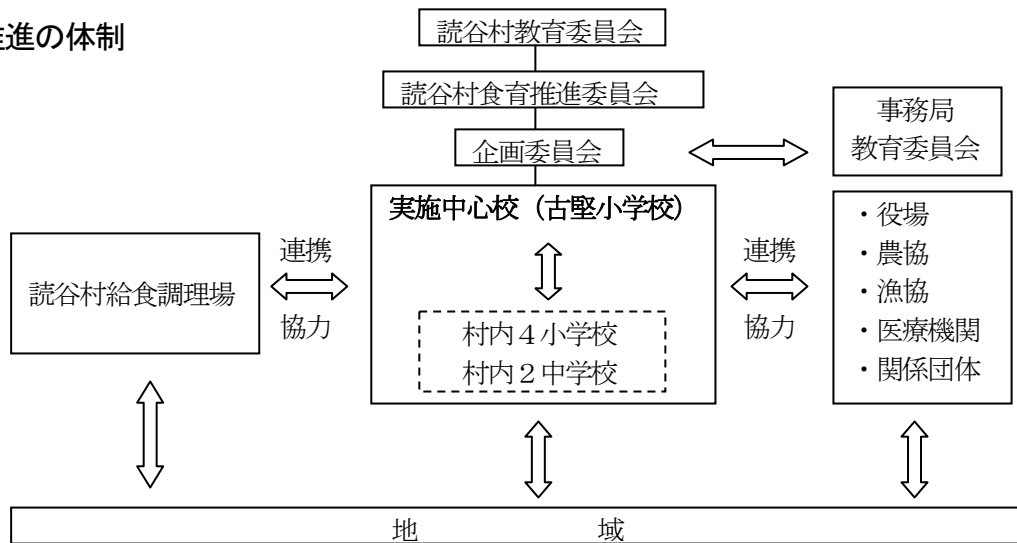


栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	沖縄県
推進地域名	読谷村

1. 事業推進の体制



2. 具体的取組等について

テーマ1 食に関する指導の充実のための方策

1 【年間指導計画の整備】

食に関する指導の全体計画、各学年での年間指導計画、他教科との関連等、年間を通した計画が立てられ、計画性をもった取り組みとなった。

2 【栄養教諭による授業への効果】

- ・豊富な資料提供により、深まりのある授業が図られた。
- ・専門性を生かした授業展開により、児童生徒の興味関心がより高まった。
- ・アンケートによる実態把握、その結果を授業で活用する等、食育をより身近なものとして捉えさせた。
- ・実験を取り入れた、体験型の授業展開が学習効果を高めた。
- ・TT授業により、授業の質の高まりがみられた。
- ・疑問に対し、すぐに聞ける体制が出来上がり、スムーズな教材研究へとつながった。



3 【栄養教諭、栄養士、学級担任による授業実践】

- 「牛乳について知ろう」・・・1年
- 「いろいろな食べ物の働きを知ろう」・・・2年
- 「大豆はかせになろう」・・・3年
- 「食事のバランスガイドって何だろう」・・・4年
- 「作っておいしく食べよう」・・・5年
- 「健康的な食生活をおくろう」・・・6年



4 【体験的な活動】年間を通した栽培活動

きゅうり、ゴーヤー、しそ、ピーマン、紅いも、トマト、ネギ、ヘチマ
トウガ、稲作り、大豆、ジャガイモ、ホレンソウ、大根、トマト、キャベツ

5 【食育月間】実施期間・・・5月

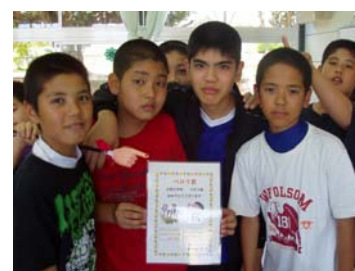
- (1)給食に関する図画、標語、作文コンクール
- (2)食育朝会・・・食べ物とウンチ（給食委員が計画実施）
- (3)早寝、早起き、朝ごはんのチェック
- (4)読み聞かせ（パステルの会）・・・食育関連の絵本
1年：グリーンマントのピーマンマン、たべもののふしぎ、まことくんとおかし、うんぴ・うのご・うんにょ・うんご（大型絵本）
2年：やさいのおしゃべり、いただきます、ピーマンマンとよふかしまおう、給食番長
3年：そらまめおいしい、つみれのまほう、とうふのにんじゃ
4年：ケンちゃんのゆめ、やさしいやさいのオイシピック あきちゃんの宇宙旅行
5年：ごはんですよおもちですよ、カツオがはねるマグロがはねる、えいようせんたいしよくレンジャー
6年：たべものたび、スープづくりあじくらべ、二人のユースケ



6 【給食の日】

毎月第一木曜日・・・各月の目標、指導内容の設定・実施

- 7 【給食ペロリ賞】・・・給食残量を意識して少なくし、給食をつくってくれた人々や食材に対して感謝の気持ちをもつきっかけとする。
※毎月の残量調査をもとに、残量の少なかった学級や先月と比較して改善がみられた学級を表彰する。



テーマ2

学校と家庭との連携による食に関する指導の充実のための取組 家庭に対する効果的な働きかけの方策に関する調査研究

1. 入学式における新入学児童の保護者へのみそ汁配布（PTA）
入学式において、「早寝早起き朝ご飯運動」の一環として、理想的なみそ汁の試飲コーナーを設置し、保護者へ朝ご飯の大切さ重要さについて、啓発運動を実施した。
2. 三世代給食試食会
○あいさつ運動や安全見守り隊でお世話になっている老人会（若保の会、波平老友会、海原会）の皆さんや保護者を招いての児童との給食会の実施。
3. 給食センター職員による地域への啓蒙活動
○学校給食の状況（食の安全、栄養管理、地域食材の活用）
○食育アンケートの実施
○栄養士、栄養教諭による食育授業への支援
○学校給食ポスター・作文・標語コンクールの実施
○食育基本法の施行（平成17年7月）
・核家族化、共働き家庭の増加 ・食事の簡便化志向 ・中食、外食の増加
○基本的生活習慣の乱れ
・就寝時間が遅くなり、そのため起床時間が遅くなり、朝食をとらない子どもが増えた。 ・高カロリー食品を多く採る傾向がある。
- 現状
・生活習慣病予備軍の可能性が高まる。
・学力の低下
(朝食を採らずに登校→体のだるさ、授業中の居眠り等)
- 早寝・早起き・朝ごはんの奨励
・運動会での内輪の配布「6時起床 9時就寝」
(5小学校、2中学校) 配布数 5,500枚



テーマ3 学校と地域による食育指導の充実のための方策

1. 教育環境プロジェクト 食育食農21年度活動状況

- 読谷村農業振興課 読谷JAの協力
- 古堅南小学校 (平成21年 10月16日) 600坪の農園
- 栽培園を活用した体験学習 (5・6年生)
- ドウガンの収穫 (役場での販売)



2. 食のふるさとめぐり

(1) 実施日 平成21年8月9日(日) 小学生・保護者(計60人)

実施場所 読谷村内

(長浜ダム→パパイヤ団地→芋畑→先進地農業センター→役場:展望室)

(2) 実施期間 平成21年7月～10月 小学校5年生とその保護者
(参加人数 80人)

実施場所 読谷村漁協協同組合「定置網」

読谷村都屋漁港(各自で現地集合)→現地解散



3. 「食育シンポジウムの開催」・・・参加人数: 338人

生涯に渡って豊かな人間性をはぐくむ食育の推進
～早寝・早起き・朝ごはんの習慣化をとおして～

(1) 食育講演会

講師: 森山克子「琉球大学教育学部生涯健康教育講師」

演題: 学童期や成長期の食育(家庭・学校・地域の役割を考える)

○こどもたちの就寝時間

○家庭における食事

- ・食卓を囲む大切さ(家族の絆)・・・個食化や孤食化→栄養不足、偏食、肥満の増加
- ・食事のリズム・・・空腹感を育てる→我慢、ありがたさ、集中力、消化器や脳の活性化



(2) 食育シンポジウム



【コーディネーター】

★情報を共有し、実践しているか
(様々な環境の子どもがいる)→
(あるべき姿にもっていけない子どもたち)
→(どのようにしていけばいいのか)
→(ハードルは高い)



★小橋川悟医師「読谷診療所所長」・・・村民の健康を預かっている専門家の立場から朝食を摂るとは → 個人管理をちゃんとできるか、できないかである。

★城間康彦「読谷村役場農業推進課係長」・・・安全安心の食材を提供する立場から
○地元食材を子どもたちに・・・ジンプナー(賢さ)の育成を目指す読谷村の地産地消
○五感について・・・幼少期の早いうちに五感を付けさせる(視覚、味覚、触覚、臭覚、聴覚)
○学校給食から芽生える地域再発見プログラム(食育・全農)・・・子どもたちの選んだメニュー

★新里眞里子「学校栄養教諭」・・・学校としての食育
○望ましい食習慣を身につけた心身共に健康な児童の育成
○平成21年度の取組
・栄養士等の加配があり、3名で給食時間の指導に当たっている。
・食育指導に関する担任とのTT指導
・食育の日の設定
・月一度の穀米
・学級への資料の配付提供 → 配膳の仕方、食器の種類、年中行事会等
・栄養満点の歌(CD)

★古波倉正「地域から」・・・主夫として

※『食卓が変われば家族が変わる』○楽しい会話 → 食事もおいしい。

【食べることが体をつくる。心をつくる】→【自分自身をつくる】→【ライフバランス→仕事、家族がある中で】

読谷テーマ1～3に共通する具体的計画

★先進地の視察（宮城県）

1. 視察期間 平成21年5月28日(木)～30日(土)
2. 視察場所 宮城県登米市立石越小学校
3. 研修報告

(1) 学校・学級内環境(校庭、掲示板等)

- ・のどかな田園風景が広がる農村地域
- ・地域への情報発信を目的にした掲示板の設置
- ・室内の掲示板は、食に関する掲示物が紹介され、児童の興味を高める工夫があった。

(2) 授業の内容

- ・実物投影機による「給食」の食材確認
- ・栄養のバランスがわかるような拡大掲示物
- ・栄養教諭による給食の食材と栄養との関係について専門的な立場から指導

(3) 学校・家庭・地域との連携について

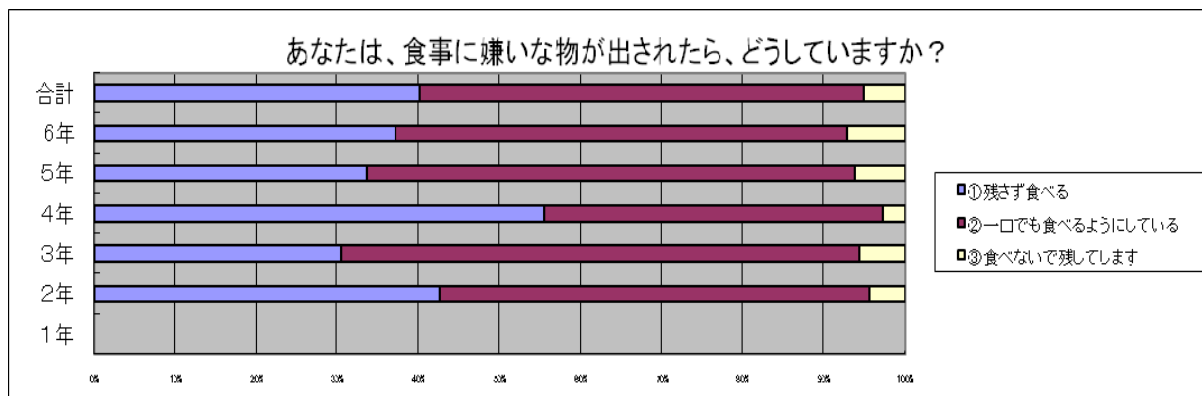
- J Aや農家の方が全面的な支援
- 耕耘、植え付け、施肥の指導（栽培に関する指導）



数字で変化のあった事項について

①事業実施により得られた効果

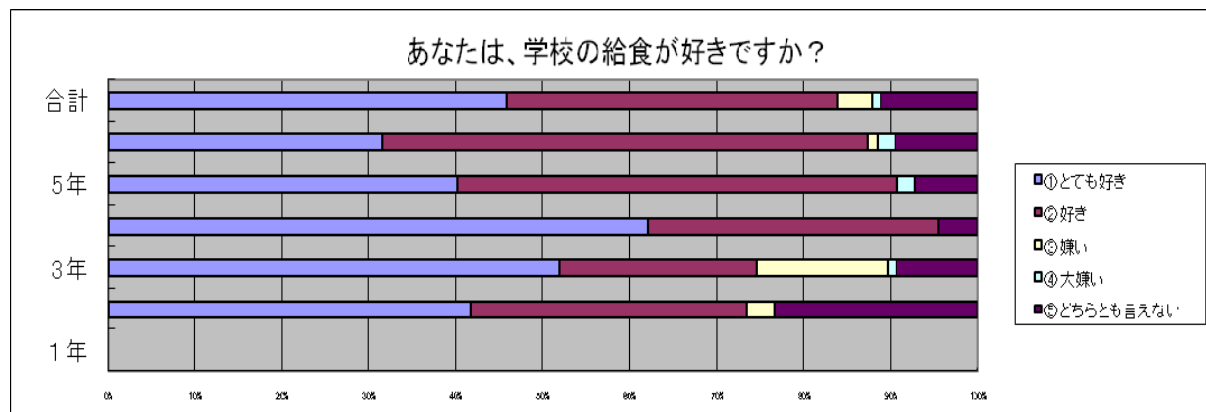
◇あなたは、食事に嫌いなものがだされたら、どうしていますか？



結果と考察

○「残さず食べる」40%、「一口でも食べるようにしている」55%で合わせると95%である。「食べないで残してしまう」児童が前年度の14%から今年度は5%減っている。食育を推進する中で嫌いな食べ物でも頑張って食べようとする意識や実践の高まりが伺える。

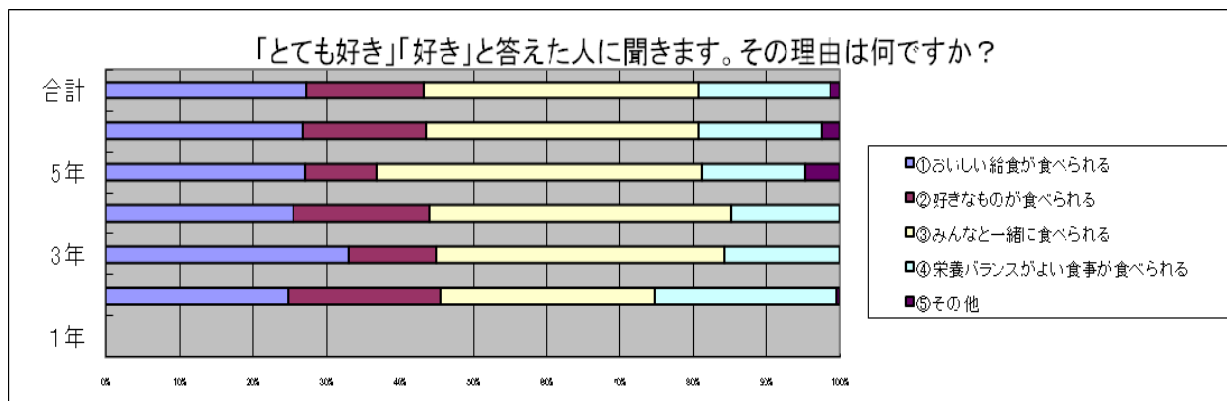
◇あなたは、学校給食が好きですか？



結果と考察

○「とても好き」46%、「好き」38%と答えている児童は、増えている。合わせると85%で、学校給食が多くの子供に受け入れられていることがわかる。

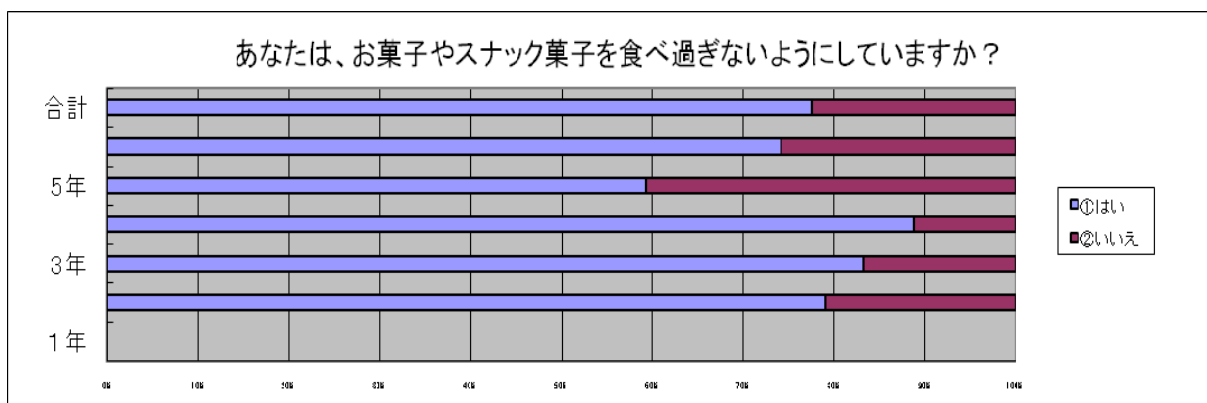
◇「とても好き」「好き」と答えた人に聞きます。その理由は何ですか？



結果と考察

○「みんなと一緒に食べられる」37%、「おいしい給食が食べられる」27%、「栄養バランスが良い食事が食べられる」18%と答えている児童が多いことから、児童は学校給食の良さを感じ、楽しみにしていることが伺える。

◇あなたは、お菓子やスナック菓子を食べ過ぎないようにしていますか？



結果と考察

○「食べ過ぎないようにしている」と答えた児童は78%で、前年度より4%増えた良い結果が得られた。養護教諭によるミニ指導や4年生の「おやつ」の学習が行われたことによるものだと考えられる。

事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

- 栄養教諭の配置による食育指導「教科・道徳・特別活動・給食時間」の充実が図られた。
- 「早寝・早起き・朝ご飯」運動による食に関する保護者や地域における関心の高まりがみられた。
- 「育てて食べる」学習を組織することで、食物に対する関心が高まり、好き嫌いのない児童が増えたこと。
- 学校と地域との連携により、食について共に考え、協力する素地ができつつある。(学校での地域人材の活用)
- 毎月の給食目標に基づいた学級指導や、食育の授業実践により、野菜を意識して食べたり、栄養のバランスを考えて食べようという意識が芽生えてきた。

今後の課題(今回の事業により新たに目立った課題など)

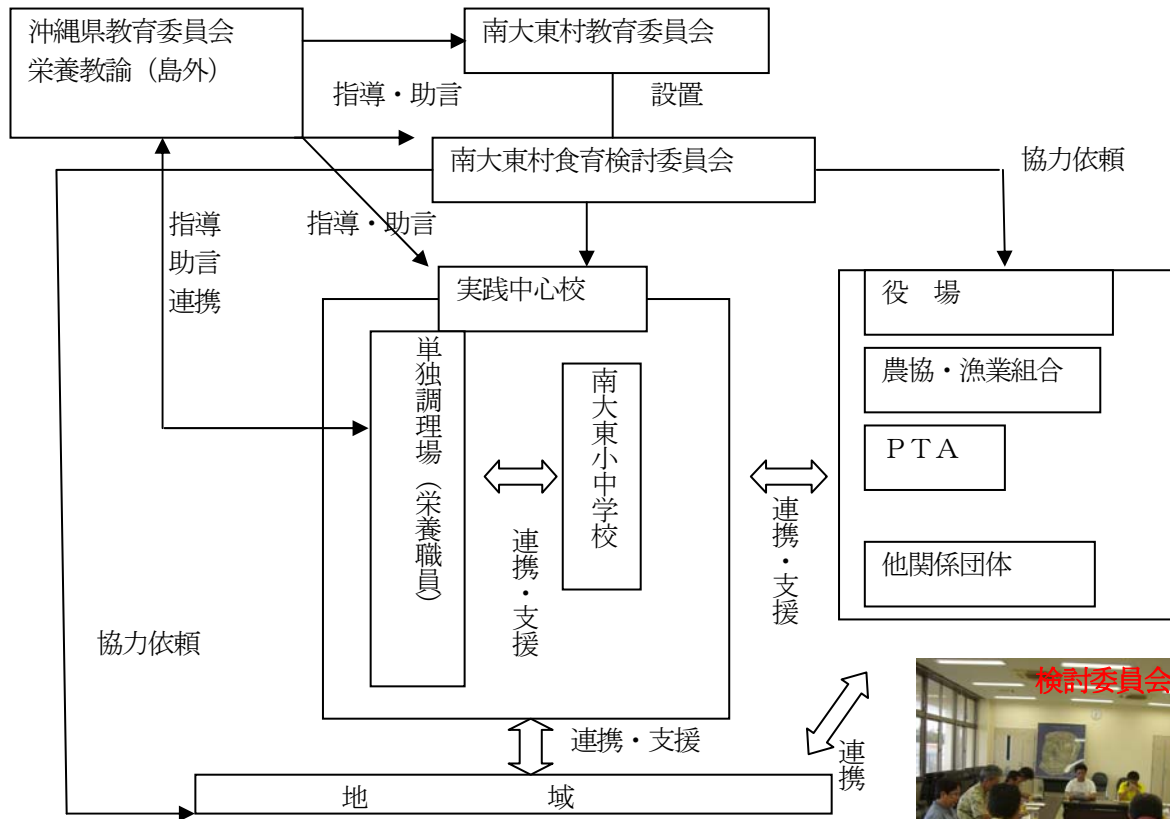
- アレルギー児童に対する配慮や家庭との連携。
- 栄養教諭や保護者、地域人材の活用等、協力体制の継続維持
- 担任自らが授業実践を出来るよう、食に関する校内研修の充実を図る。
- 各教科と食育との関連を整理し、意図的、系統的なカリキュラムを年間計画へどう位置づけるか。
- 食のリズムを通じた生活リズムの確立を図る。(決まった時間に食べる)

栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	沖縄県
推進地域名	南大東村

1. 事業推進の体制

(実施体制図)



2. 具体的取組等について

テーマ1 各教科における食に関する指導充実のための方策

- 食育指導案の研究・企画立案の作成 (実践活動に向けた教育計画の確認)
- 栄養教諭を招聘、栄養職員を活用した食育授業の実践 (TT 授業の実践)



- 中学校・小学校において教科と関連した食育授業の実践
- 栄養職員・学校職員研修会参加(5月)・先進地視察(県内・読谷村 県外・シボジユム参加)
- かみかみ週間の実施(食材をよくかんで食べるための指導を行い、租しやくの大切さを実感・意識させる指導)

○学校農園の作り（家庭・地域の協力で学校農園作り）と農園づくり指導



○ 地元食材を活用した料理教室・弁当作り



テーマ1～3に共通する具体的計画

○食育の日の実施

- ・「給食だより」と連動させ、毎月第1木曜日に小中学年全クラスにおいて、食育に関する指導を行う。
- ・生活リズムカードを利用して家庭との連携した生活習慣を身につける。

○学校が家庭・地域を巻き込んだ青空給食の実施（7月5日実施）

- ・ねらい ①食に関する指導の充実と地域の産物、食文化に対する理解を深める。
- ②食材を自ら育て、調べて食することで食べ物に対する感謝の気持ちを育てる
- ③保護者・地域を巻き込むことで、食に関する指導啓発活動に役立てる。



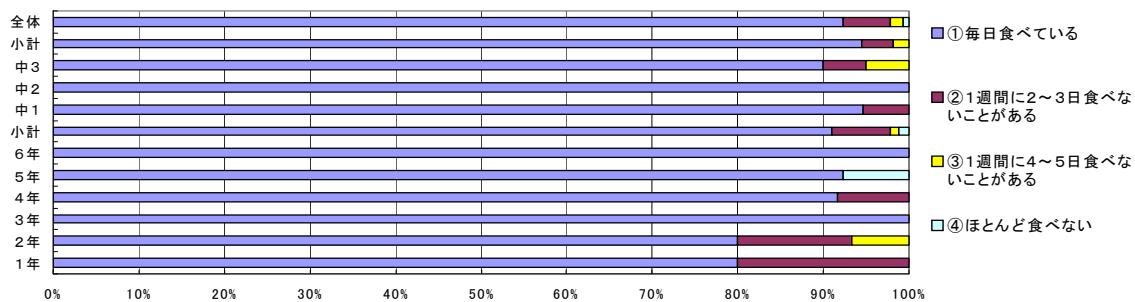
数字で変化のあった事項について

○6月の給食残量検査を行った結果。南大東小中学校の児童生徒は常に残量が少ない。

○アンケート調査の結果

6月に実施した調査は、昨年度1月時点にくらべ、わずかだが向上が見られる。

① 90%以上の児童生徒が毎日朝食を食べている。(朝食の状況調査より)



②朝ご飯の内容が、米、おかず、汁物がそろった朝食を取っている割合が増えた。

③学校給食は好きだと答えて割合が8割以上になった。

- ④75%の児童が、給食の苦手な食べ物を頑張って完食している。(小低学年66%→72%向上した)
- 生活実態調査の結果、朝7時までに起きられる児童生徒の割合が増えている。また、保護者の意識も少しずつ変化しておりその割合も70%以上である。
 - 給食残量調査において5月で全学年の残量が5%~10%であったが、1月には全学年で0%と完食するようになった。

事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

- 食育の日の設定(毎月第1木曜日)
 - ・食に関する指導の充実を図ることを目的に、朝の時間帯に全校(小中)一斉に学級担任による指導を行う。

<効果>

身に付けなければならないこと、頑張ることを、栄養職員が作成した給食だよりをもとに「めあて」を確認しその「めあて」を達成するために各家庭・学校が連携して実践していく体制が整った。
- 体験活動(野菜作り、料理教室)の実践を通して食の大切さを学ぶ事ができた。また、地域、家庭とも連携して活動を行うことができた。
- 食に関する指導計画・指導案の年間計画作成
 - ・年間の指導案・学級活動指導案・道徳・生活科など各教科における指導案を作成したことで、学校での食に関する指導が昨年度に比べスムーズに行うことが出来ている。

今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

- 地域との連携を強化し「食」への興味、関心を高め「望ましい食習慣」の定着に向けて普及・啓発活動の取組が継続的に取り組むことが大切である。
- 朝食欠食で登校する児童・生徒は一部の子どもたちだが、地道に継続して指導を行う。
- 体験活動は、家庭、地域の協力無しには行えないので栽培活動、漁業体験、料理教室などこれまで培った連携を大切に次年度以降も継続して取り組んでいく。
- この2年間の取組の経験を活かして、**計画→実践→評価→改善**を大切にしながら、小学校1年生~中学校3年それぞれの成長過程に応じた食育プランを継続した取組を行っていくことが大切である。
 - 児童生徒の食育に対する知識、意識は大いに向上し、今後の生活に活かせると確信している。しかし、実際の生活の中でいかに生かしていくことが出来るかは、家庭での取り組み、地域のサポートが大切である。そのためには学校、家庭、地域がより連携して子供たちを育てていく環境づくりが今後も大切である。